

## 特 集

# 原水爆禁止宣言の意義と創立者の平和思想

平和問題研究所所長 小 出 稔

創価大学平和問題研究所の小出と申します。難しいテーマを担当しますが、原水爆禁止宣言の意義を皆様と共に学んで行きたいと思えます。

戸田先生の原水爆禁止宣言は、その名の通り「宣言」でありまして、その文は非常に簡潔です。それ故に、宣言の意味と意義については、宣言を発表された当時の時代状況、宣言に至るまでの戸田先生ご自身の思索、そしてその宣言を継承された創立者池田先生の行動に照らして考える必要があると思えます。

このように考えるとき、私は原水爆禁止宣言には、三つの意義があるのではないと思えます。一つは、世界平和を目指す師弟共戦の大宣言という意義です。原水爆禁止宣言は、師匠である戸田先生が発表され、その後弟子である池田先生が実践されたという、言わば師匠と弟子の間に「時間差」のある宣言ではなく、宣言が発表された時点で既に、師弟が平和への決意を共にした宣言でありました。次に、原水爆禁止宣言には、民衆が主役となる平和運動の大指針としての意義があると思えます。民衆を支配し分断しようとする勢力に対し、真に人間の立場から平和を求めてこられた創立者の行動に、その精神は端的に現れていると思えます。三つ目として、原水爆禁止宣言には、人間復興を目指す大思想を樹立しようとする決意が込められていると思えます。人間が生み出したものに人間自身が支配されてしまう。そのようなおろかな状況を打開する仏法に基づく哲学・思想を高らかに示したのが、原水爆禁止宣言であると思えます。

以下、三点の意義について、それぞれ、少し掘り下げてみたいと思います。

まず、「世界平和を目指す師弟共戦の大宣言」という点ですが、「遺訓すべき第一のもの」として戸田先生が発表された原水爆禁止宣言は、実は池田先生と共に、その内容を練り上げてきたのではないかと思います。

創価大学の中央図書館に、創立者が若いころから資料として収集した書籍を収めた「池田文庫」というコーナーがあります。本日のシンポジウムで発表するに当たり、私は図書館の本で原水爆禁止宣言が発表された当時の時代状況を調べようとしたのですが、その時一つのこと気づきました。池田文庫に、1950年代、特に原水爆禁止宣言が発表された57年頃に出版された核兵器、原子力等に関する書籍が数多く有ったのです。

1950年代は、アメリカとソ連の間で原水爆の実験競争が激しくなった時代でした。1954年3月には太平洋のビキニ環礁で行われた水爆実験で、日本のマグロ漁船が被爆しました。この事件を契機に日本では3200万人の原水爆反対署名が集まり、1955年には第一回原水爆禁止世界大会が開かれています。

このような時代状況の中で、戸田先生と池田先生の間で、原水爆に関する話がなされたであろうことは、むしろ当然だと思います。原水爆禁止宣言がなされる少し前の1956年11月には、池田先生がある会合で「原爆から日本を救おう」という戸田先生の話がされたという記録が残っています。また、57年の8月には、戸田先生が静養先の軽井沢に池田先生を呼ばれて、原水爆禁止宣言の思索を深められたそうです。

確かに言える事は、池田先生がいなければ、1957年9月8日の戸田先生のお話が「原水爆禁止宣言」として後世に残ることは無かったと言う点です。戸田先生のお話の重要性を自覚し、発表の舞台となった青年の体育祭の行事運営の一切を無事故で進め、戸田先生のお話を当時としては高価なカラー映像で記録し、そして宣言が発表された後は、自らその宣言の重要性を展開し訴えていった。そのような戸田先生と不二の呼吸で戦う池田先生がおられて、原水爆禁止宣言は完結しました。その意味で、この宣言は、師弟共戦の大宣言であったと言えると思います。

次に、原水爆禁止宣言は、民衆の平和運動の大指針としての意義があると思

います。原水爆禁止宣言では、仏法の生命尊厳の立場から死刑反対であった戸田先生が、原水爆を使ったものは「死刑」にせよと訴えられています。戸田先生が敢えて「死刑」と言う言葉を使った理由を、池田先生は「原水爆を保有し、使用したいという人間の己心の魔性それ自体に、朽ちざる楔を打ち込むためであった」と述べておられます。

では、その「朽ちざる楔」とは何か。それは、一言で言えば、人間を自在に支配しようとする権力への「怒り」ではないかと思います。創価学会の平和運動の原点は、戦前の軍国主義的政府の弾圧により獄死された牧口初代会長です。二代会長の戸田先生も、牧口先生と共に投獄されました。そして、三代会長の池田先生も、この原水爆禁止宣言発表の直前の7月、創価学会を脅し支配しようとする権力の画策で、全く無実の選挙違反の嫌疑で逮捕拘留されました。

この権力への怒りは、どの国の核兵器に対しても民衆と言う立場から等しく反対すると言う、創価学会の反核運動を支えていると思います。ここで紹介しておきたいのは、1974年5月に創立者が中国を初訪問された時の様子です。当時は、72年に日中国交回復がなされていたとは言え、中国は未だ文化大革命の最中にあり、政治的に極端で硬直した雰囲気が強かったと思います。日本の新聞社でも親中国的と認められた新聞社だけが、北京に特派員を置けるような時代でした。

その時代に、中国政府から招待を受ければ、「親中国的」というお墨付きを得たようなものですから、希少価値のある「中国とのパイプ」を大事にして、中国政府が不愉快と思うような言動は避けるのが普通だったと思います。しかし、この時池田先生は、訪問の受入機関であった中日友好協会の副会長との懇談の際、戸田先生の原水爆禁止宣言を紹介し、核兵器に反対する考えを明らかにしました。その際の様子は、聖教新聞連載の新人間革命「友誼の道」の章に詳しく述べられています。

この「友誼の道」の章のお話によれば、核兵器に対する考え方では、池田先生と中国側の代表との間で、異なる部分もありました。しかし、このような異なる意見を持つ相手と、どのように切り結んでいけるかこそが、平和運動で最

も重要な点だと思います。核兵器と言う重要な政治的問題に対する意見の相違にも拘らず、初の訪中から30年以上を経た今日、北京大学や復旦大学と言う中国のトップレベルの15大学に池田大作研究所が設置されていることから分かるように、池田先生は中国の人々が最も尊敬する日本人と言っても過言でないほどの信頼を勝ち得てきました。

原水爆禁止宣言は、核兵器を絶対悪と断じており、その主張において妥協はできません。しかし、だからと言って、少しでも意見が異なれば、相手と決裂しておしまいと言うのでは、平和を目指す運動が返って分断をもたらすと言う矛盾に陥ります。滑稽に思われるかもしれませんが、平和を論じる学者や、平和を求める運動に、そのような排他的な性格を感じるのは、珍しいことではありません。事実、広島・長崎の悲惨な体験に基づき、1955年には3200万人もの署名を集めて始まった日本の核兵器反対運動も、10年を経ずして分裂してしまいました。

確固たる理念に基づく平和を訴えながら、なおかつ人々の連帯を拡げ行くことは、思いの外困難です。民衆の側に立つという勇気と深い思索、そして何よりも相手の心を開く人格が求められると思います。74年5月の中国への初訪問に続き創立者は、同年9月には、当時中国と軍事的衝突さえ危惧されるほど対立していたソ連を初訪問します。ソ連の要人の中には、日本社会における創立者の影響力を誤解して、中ソ対立の脈絡の中で、日本が中国ではなくソ連寄りとなるよう、影響力を行使するように、半ば恫喝的に創立者に迫った人物もいたようです。この時も創立者は、一民間人として、民衆レベルの平和・文化・教育交流を進めるご自身の信念を述べ、中国よりでも、ソ連よりでもなく、世界の民衆の側に立つ立場を明らかにしています。政治的に鋭く対立する二国から同時に、人間としての信頼を勝ち得た創立者のおかげで、開学間もない創価大学も早くから、中国とソ連双方の一流大学と交流を進めることができました。ともあれ、原水爆禁止宣言に示された民衆主体の平和運動の意義は、あらゆる国、文化、政治制度、宗教の人々と、1600回もの対談を重ねながら、友情を結び、平和の連帯を拡大してこられた池田先生の行動に具現してきたと思います。

三点目の原水爆禁止宣言の意義として、人間復興を目指す大思想の樹立を求めている点を挙げたいと思います。原水爆禁止宣言の中で戸田先生は、核兵器を絶対悪であると断じた上で、その根源的理由を「世界の民衆の生存の権利」に求めました。この「生存の権利」とは、いわゆる20世紀的な「生存権」、すなわち国家に最低限度の生活の保障を求める権利ではありません。戸田先生の言われる「生存の権利」とは、人間生命の尊さを解き明かす仏法の眼から見て、個々の人間生命が最極の存在であると言う事実そのものを、「生存の権利」と言う言葉で表現されたのだと思います。

人間生命には、愚かな命も、欲望の命も、また平静な人間らしい命も、更には人を助けようとする尊い命も、全て具わっていると言う、動かし難い事実を認めた上で、人間生命それ自体の中に「より良く」生きようとする力を認めるのが仏法です。この生命本来に具わる「より良く」生きようとする力を、「仏の力」と表現しますが、この仏の力によって人間生命全体をコントロールしていくことを仏法は説きます。

このような視点から見ると、核兵器の存在は、他に勝らんとする欲望の生命の異様なまでの肥大化と捉えることができます。そして、核兵器の問題を根本的に解決するためには、肥大化した欲望の生命を、本来の大きさにまで引き戻さなければなりません。

「勝ち組」「負け組」という言葉が象徴するように、現代の世界は、競争を通じた欲望の追求に、殆ど歯止めをなくしています。核兵器の存在はその最たる例ですが、世界経済の発展に伴う地球環境の破壊、世界市場を自由に移動する金融資本が莫大な利益を生む一方で広がる経済格差など、人間の欲望の際限ない追及は、今日の世界に深刻な危機的状況をもたらしています。今こそ、人間が作り出したものに人間が支配される愚かさを指摘し、人間の欲望をコントロールする大思想の樹立が求められています。原水爆禁止宣言は、直接的に人類の生存に脅威をもたらす核兵器の廃絶を一つの指標として、より広い意味での人間復興の大思想樹立を求める宣言であったと思います。

以上、原水爆禁止宣言の意義を三点にわたって述べさせていただきました。最後に、原水爆禁止宣言からわれわれが学ぶべき点をまとめて、結論に代えさ

させていただきます。まず何よりも、原水爆禁止宣言は、師匠に呼応する弟子の戦いによって、宣言と言う形で結実し、後世にも残ってきました。そこから我々が学ぶべきことは、半ば自明であります。創立者がおられる今、その平和思想を学び、創価大学で発展・継承させていかねばならないと思います。

次に我々の平和運動は、自らの平和に対する思想を堂々と述べ、譲れない原則を堅持しながらも、その運動は、あくまでも個々の人間の幸福を目的としたものであり、人間の連帯を拓け行くものでなければならない。しかしながら、このような平和へのアプローチは、時に困難な矛盾をもたらします。自分の価値観の実現のために暴力の行使を辞さない人々にどう対処するかなどは、その端的な例と言えます。今年のSGIの日記念提言で創立者が議論されているように、そのような暴力に対しては、第一義的には、暴力を規制する国際社会のルールや制度の実効性を高めることで対処することが必要だと思います。この点については、次の発表者である中山先生が、国際法の観点から論じる予定です。

しかし、国際社会の制度やルールの実効性を最終的に担保するものは、平和を求める民衆の連帯です。そして、そのような連帯を広げ行く鍵となるのは、どこまでも人間を信頼し対話を求める人格だと思います。1974年に鋭く対立する中国とソ連を相次いで訪問し、双方から人間としての信頼を勝ち得た創立者の行動は、人格と対話のもつ可能性を端的に示していると思います。このような偉大な創立者を頂く創価大学では、まず教員自身が知性と共に人格を磨き、民衆の側に立ち、世界平和に貢献できる人材を陸続と輩出して参りたいと思います。

この決意の表明を持って、私の発表を終らせていただきます。ご静聴、ありがとうございました。

\*\*\*\*\*

## 【質疑応答】

私の方にいただいている質問で、非常に中心的なテーマになっているのが、やはり核廃絶に向けて、我々庶民レベルで一体具体的にできる行動は何かという質問を多く受けております。今回、お話しさせていただくに当たって、私自身も、例えば1945年の段階で3発しかなかった原爆が、先ほど中山先生のお話にあった通り、現在は27,000発の核弾頭があります。実に9,000倍になったという現実の前で、その間にやってきた反核運動とは一体何なのか、このことに答えられずして、一体どういう意味があるのかというところから思索を始めました。

なかなか直接的にお答えすることは難しいのですが、国際政治の中では時に想像し得ないことが起こります。その1つの例として冷戦の終了が挙げられます。1989年11月に、冷戦が最終的に終了していくわけですが、私は当時アメリカで国際政治を学ぶ大学院生でした。そういう国際政治が大きく変化するとき、大学院生として学んでいることは、非常に幸運なことではないかと思いつつ過ごしたことを覚えています。その当時を思い出すと、1989年11月にベルリンの壁が崩壊するのですが、そのわずか数カ月前でも、冷戦が終わると予想していた学者は1人もおりませんでした。一流の学者も含めてです。私もそうは思っておりませんでした。本当に誰もが、この冷戦というのは終わらないのだという前提で議論していました。1980年代は平和運動や反核運動が盛り上がって、今から思えば平和的な冷戦構造の終結に大いに寄与しているわけですが、しかし当時は、いろんな平和運動があっても、冷戦の大きな構図は変わらないと思っておりました。それが、ある意味で、あれよ、あれよという間に、冷戦が終わっていくわけです。

この冷戦の終結過程で、ルーマニア等で少し混乱はありましたけれども、あまり流血の惨事を伴わずに大きな変化が起こった。これはやはり80年代にヨーロッパで起こっていた反核の運動、平和運動、そういうものが市民の連帯、東だ、西だという体制を越えて市民の連帯ということを築いていたことが大きかったのではないかと。これはあとの説明になりますが、国際政治学や平和

学の中でそのように議論されています。ですので、80年代に、表面的には何の意味もないのではないか、核兵器を実際に減らすことはできていないじゃないかと批判されていた平和運動が、実は冷戦の終結過程に大きな役割を演じていた。おそらく、時には平和運動に携わる当事者も無力感を感じるほど、冷戦の分断は大きな壁だったに違いない。実際に、国際政治を学ぶ専門家は、冷戦終結の直前まで、真剣に冷戦が終るとは考えていなかったわけですから。けれども、そのような深刻な世界の分断の状況も、時に大きく変えてきたのが人間の歴史である。そのような事実に鑑みる時、歴史学者のトインビー博士が「水底のゆるやかな動き」と呼んだ、そういうレベルに市民の運動、平和運動というものは大きな影響を与えうると、そのような可能性を見出せるととらえられるのではないかと思います。

この点で、本日の私の話の中で、1974年の創立者の中国とソ連の訪問を話しましたが、これに続いて、75年1月には、創立者はアメリカを訪問して、キッシンジャー国務長官に会っているわけです。当時の中国、ソ連、そして、アメリカのトップの指導者に一民間人としてお会いしている。このときの行動というのは、もっともっと大きく評価するべきではないかと思います。私の専門の国際政治の分野から、今後研究を進めたいと思いますが、民衆の代表である先生が、国際政治の中でどのような影響を与えたのかということを手本に考えていくことができるのではないかと思います。

先ほど、中山先生が、日本は大きな矛盾を抱えている。すなわち、核兵器に反対したい立場でもありながら、日米安保条約の下で、実際には核兵器の下にいる。このことをどうすればいいのか。今年5月に、戸田記念国際平和研究所が北東アジアの平和に関するシンポジウムを中国で行いまして、私も参加させていただきました。ちょうど聖教新聞で、新・人間革命の『友誼の道』の章が連載されている途中でしたので、先生は中国の方と一体どのように核兵器について話をされたのかなと思いながら中国に行きました。学者同士の立場でも、「中国は核兵器を放棄すべきである」とは語りにくいのです。そのように言う、きつと、向こうは日米安保条約を持っていることの矛盾を突いてくる。そう思うと、どうもこちらの切り口が弱くなる。これをどうすればいいのかと



思っていたところ、ちょうど中国で会議をしている間に、創立者が1974年にご自身が訪中されたとき、戸田先生の原水爆禁止宣言の思想を堂々と述べられたことを連載されていまして、答えを見せていただくような思いでした。日米安保条約のことを言われてちょっと引くのは自分が日本人であるという発想、すなわち日本という国家の中の枠にいる発想から自分が抜けられないでいることだと思います。全人類と言う立場に立って、国家の枠を超える行動を示す創立者の姿に、手本を見出した思いでした。そのような師匠の行動に、自分の行動を合わせていく、そういう中に、一庶民の立場から世界平和への貢献の可能性というものも、見出せていけるのではないかと思いました。以上です。(拍手)